2016.9.18　年間第２５主日

富は不正にまみれたもの、それを真の友人を得るために使え

ルカによる福音書　16:1-13

（そのとき、イエスは、弟子たちに言われた。）

「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄使いしていると、告げ口をする者があった。そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。そこで、わたしは言っておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」

「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできな

い。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

説教

現代風にきょうの福音をアレンジしてみます。

高級官僚が不正をはたらき、公金横領の疑いがかけられます。するとその官僚は、天下りできそうな会社の社長を呼びつけて重要な秘密情報を漏らし、恩を売って首になったあとの便宜を図ってもらうようしました。その一部始終を知った高級官僚のもっとえらい官僚が彼の抜け目なさをほめ、そして公金横領では裁くが、情報漏えいについては不問にしました。

わたしたちの罪をお許しください、わたしたちも人を赦します。

これは「主の祈り」でわたしたちが日ごろ親しんでいる祈りです。きょうの管理人も自分の罪を赦してもらおうと、人の罪（借金）の減額をする、つまり「人を赦す」ということをしました。

そこで、イエスがその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。イエスはお話しになった。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」シモンは、「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」と答えた。イエスは、「そのとおりだ」と言われた。

ルカ 7:40-43

ルカ７章の金持ちは借金を帳消しにしました。きょうの管理人は借りを帳消しにするだけの権限がなかったのか、減額しています。そのことで負債者からいくらかでも愛してもらおうとした、という読み方もできます。

それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄え

ができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」ルカ 12:16-21

このときの神は富を自分のためだけにつかう金持ちにたいして死という裁きを下したとイエスは語られました。一方できょうの管理人に対しては賞賛します。管理人は横領はしましたが、それがバレているので取り上げられます。しかし、さらに働いた不正に対してはほめられています。

主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。そこで、わたしは言っておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。ルカ 16:8-9

きょうの福音のわからない箇所のハイライトはここではないかと思います。「不正にまみれた富」で友をつくれ、金がなくなったら「永遠の住まいに迎え入れてもらえる」

わたしはある時期かなり金儲けをしていました。その時、自分が金儲けに成功しているのは自分の能力が優れているからではない、どうもなにか別の力が働いていまの金儲けができていると気づいたような気になりました。その時のわたしは世間さまのおけげです、と適当にお茶を濁して、稼いだ金で人にごちそうしたり、なにかプレゼントをしたり、気が向いたら寄付をしたりしていました。しかし、これもながくは続きませんでした、金がなくなったというわけではなく、稼ぎがへったので自分のためだけにしか金をつかうことができなくなりました。

しばらく時をへてわたしは牧師になろうと決意し、いま牧師として働いています。でも自分のなかに限界があることに気づいています。

それは、からだは滅びるが、たましいは滅びない。というところまでしか宗教理解が及ばないところです。

きょうの管理人がほめられたように「光の子らよりも賢くふるまって」いるのだろうかというところに限界を感じています。
福音のなかで「主人」の賞賛は「この世の子」と「光の子」との比較にもなっています。光の子とは天使たちのことを差しているのでしょう。もっと生々しく具体的に言えば聖職者たち、よい教会員たちかもしれません。ある意味「この世」から離れて天に近い者たちのことを指しているのでしょう。図式な言い方しかいまはできないのですが、からだ＝この世の子、たましい＝光の子と対比してみると、救いとはこの世の子でありながら光の子でもあるという構図なのかという宗教理解の限界です。でもこのような理解をしたとしても現実的にそれを実行することができるのか、できないんじゃないか。わたしはこの理解では足りないと切実に思っています。きょうの福音を読んでわたしはこのような感想をもちました。